

戸外風景の佇まい

福富健男『流域』、海程新社、2005年9月23日、定価2500円（税込）

Seirô ISHIKAWA

石川 青狼

句集「流域」を手にして、先ず表紙絵の宮崎県特産・柑橘の一種「日向夏」（前田舜敏氏）と金子兜太氏が書かれた題字「流域」と作者名「福富健男」の書字の、実に土の匂いの強い風景が、句集全体の展開を予感させるものである。

あとがきに

本句集は、平成九年から平成十五年夏半ばまでの凡そ六年間の国内作品を主体に、平成六、七年の中国、平成十年のアメリカ合衆国、十三年暮れから十四年初めの中米（メキシコ、グアテマラ、ホンジュラス）の旅吟句を纏めたものである。

と書かれているように、中国、アメリカ、中米、と俳句の舞台も日本に止まらず、地球規模の新たな俳句世界を形成することが出来た。だが、その底流にあるものは

戸外風景に浸り切って遊んでいた年少期の想いは今も身体や頭に強く残っていて、私の現風景となっている。

と述べるように、日本や海外でも戸外風景は、作者の最も快適に行動し体感することにより、詩的感動を呼び起こす原動力になっている。まさに、土の匂いのイメージが付きまとう。

序文を書いた森田緑郎氏の文を借りれば

ちなみに集の生きとし生ける物を大別してみると植物系統で八十九種類。その内訳は樹木でユーカリの木始め三十種。草花で卯の花を入れ三十七種。野菜果樹でアボカドを含め十四種を取りこみ、更に生物系統では六十九種類。内訳は鳥獣で駝鳥始め三十五種、魚介・昆虫で鱈以下三十一種を扱っている。

と書かれているように、「流域」の三百五十七句のほぼ半数に近い作品群が、動植物を対象とした句集であり、やはり福富氏の生まれ育った、九州は宮崎市に隣接する清武町の木原という、水田と台地の畑に挟まれた集落、農業地帯の風景が「源」なのである。

では、福富氏の「戸外風景」を、しばし逍遥したい。

「流域」の書き出しの一句は、中国旅吟の

川底に藻を敷き我らの蒼い旅

で始まる。異国の旅への昂揚感が、端的に表現され好感である。この「蒼い旅」に中国の茫洋とした大陸の空間を言いとめていよう。また、この句の中で川底に「藻」を敷き詰める作者の「思い」は何か。この「流域」の中で、「藻」や「藻屑」を扱う句は次ぎの三句がある。

靄の湖藻を曳きずってかいつぶり

業解かれ藻屑に浮いてかいつぶり
湖辺の洗濯藻屑の上に白鷺立ち

一句目と二句目の「藻」「藻屑」に対しては「かいつぶり」、三句目は「白鷺」を介して、鳥たちとの交感と「藻」への信頼感が感じられ、作者の内面に宿る生の「声」を聴く思いがする。ゆえに、「流域」書き出しの一句の「我ら」にも「藻」への全幅の信頼が読み取れる。

俳句作家には、それぞれ信頼出来るキーワードがあるはずである。福富氏にも安心して自分を曝け出せるキーワードがあるはず。それは、句集全般に溢れる動植物、昆虫等の存在である。ある時は氏とオーバーラップさせ、また氏の喜怒哀楽の中核を成している。次にその句群を一部紹介しよう。

異郷かな狂飛びしておにやんま
吃る鴨ぶつきらぼうに雲止まり
矢継ぎ早に鶯鳴いて竹林の父
鼻濁音の青い鴉や新樹光
潮騒に聞耳たてて青葉木菟
わが腕に河童の歯形植込まれ
飽食を重ねる日日の鶴の髯
曖昧な日本人のわたし紅い蟹

もちろん、客観的に見る対象物ではあるが、作者の心情を吐露する生き物たちであり、愛すべき存在なのである。特に、六句目の「河童」の句は、作者と河童の同化する姿が見られ、また河童が育まれる風土さえも垣間見える。ではここで、海外での俳句を少しあげてみたい。

早春の瀛江の馬は置き去りに (中国)
横たわる恐竜の骨格マンハッタン (アメリカ)
黄の赤の街ブロードウェイぶぎぶぎ (アメリカ)
背に鳩アビニョンの娘の黒眸 (アメリカ)
荷を解かれ仰向けざまに背搔く驢馬 (ネパール)
アボカド積む頭上の籠の光りかな (中米)
窓枠に子の顔を嵌め手織りの村 (中米)
蒙古斑の彼等に黍の赤いひげ (中米)

などは紛れもなく海外の戸外風景であり、異国に立ち直に肌で感じ取った風景が表現されている。その中でも「蒙古斑」の句には、中米という遠い異国に、自分と同じ血の繋がりを感じ取り直感し、その土地の生活感を「黍の赤いひげ」に熱く書かれている。

最後に、福富氏の海外の戸外風景の集積を土産としての帰郷の一句を添えて、終りとしたい。

きんこんと耳垢溜めて帰郷する